

子宮頸癌ワクチンについて

薬剤師 白澤 宏美

子宮頸癌ワクチン（ヒトパピローマウイルスワクチン）はすでに 100 カ国以上で使用されています。国内では、サーバリックス®(Cervarix®)とガーダシル®(Gardasil®)という予防ワクチンが使用できるようになりました。



サーバリックス®(Cervarix®)



ガーダシル®(Gardasil®)

このワクチンに含まれるヒトパピローマウイルス（HPV）には遺伝子がないので、接種しても感染することはありません。HPV のなかでも特に子宮頸癌の原因となりやすい HPV16 型と HPV18 型のウイルスに対する抗体をつくるための不活化ワクチンです。

ワクチンは、1~2 回の接種では十分な効果がでないため、肩に近い腕（上腕三角筋）の筋肉内に半年の間に 3 回接種する必要があります。

サーバリックス® は初回接種から 1 か月後、半年後に再度接種します。ガーダシル® は初回接種から 2 か月後、半年後に再度接種します。副反応（薬でいう副作用と同意）として、注射をした部分の腫れや、まれに疲労感、筋肉痛、頭痛、嘔吐、下痢などが起こることがあります。対象年齢はサーバリックス® が 10 歳以上の女性、ガーダシル® が 9 歳以上の女性で、年齢の上限はありませんが、接種の助成対象者は中学 1 年生～高校 1 年生（一部の高校 2 年生）の女子です。詳細は各自自治体へご確認ください。

このワクチンは、すでに今感染している HPV を排除したり、子宮頸部の前がん病変（がんになる前の異常な細胞）やがん細胞を治す効果はなく、あくまで接種後の HPV 感染を防ぐものです。感染する前に、ワクチン接種を行って HPV 感染を防ぐことで子宮頸癌の発症を予防できます。また、ワクチンの接種で、子宮頸癌の原因の多くを占める HPV16 型と HPV18 型の感染を防ぐことができますが、全ての発がん性 HPV の感染を防ぐことができません。子宮頸癌を防ぐためには、予防ワクチンの接種だけではなく、定期的に子宮頸癌検診を受けることが大切です。予防ワクチン接種後も、1～2 年に 1 度は検診を受けるようにしましょう。

ワクチン接種は、かかりつけ医に相談して早めにスケジュールを決めましょう。

くす通信

第 136 号
2012 年 6 月 1 日

国立病院機構 熊本医療センター発行



ヒトパピローマウイルス

子宮頸癌と HPV ワクチン

子宮頸癌ワクチンについて

花：紫陽花

「くす（樟）」の由来について

くす（樟）は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし（薬師）とは、医師のことを指し、くすしぶみ（薬師書）は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

診療科

- 総合医療センター 総合診療科、血液内科、呼吸器内科、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科
- 消化器病センター 消化器内科
- 心臓血管センター 循環器内科、心臓血管外科
- 脳神経センター 脳神経外科、神経内科
- 感覚器センター 眼科、耳鼻いんこう科、皮膚科
- 画像診断・治療センター 放射線科
- 救命救急センター 救急科
- 精神科 ■ 小児科 ■ 外科 ■ 整形外科
- リハビリテーション科 ■ 泌尿器科 ■ 産婦人科
- 歯科口腔外科 ■ 形成外科 ■ 麻酔科 ■ 病理診断科

- 🕒 診療時間 8:30～17:00
- 🕒 受付時間 8:15～11:00
- 🕒 休診日 土・日曜日および祝日

急患はいつでも受け付けます

〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5
TEL 096 (353) 6501 (代表)
FAX 096 (325) 2519
H P <http://www.nho-kumamoto.jp/>

産婦人科

当院産婦人科は、婦人科腫瘍の治療を主に施行しております。子宮頸部上皮内癌を始めとする子宮頸癌、最近増加傾向にある子宮体癌、卵巣癌等婦人科悪性腫瘍の症例数は熊本県内はもとより、九州圏内でも有数であり、県内全域より紹介患者様を受け入れて、加療にあたっております。また、術後の経過観察は地域への逆紹介を推進しており、遠方より来院された患者様にも安心して治療を受けていただくように取り組んでいます。さらに、当院の特徴である救急患者様に対しても、24時間体制で対処できるようにしているため、産科疾患（新生児は除く）、一般産婦人科疾患も十分対処可能です。

子宮頸癌とHPVワクチン



産婦人科医長
西村 弘

子宮頸癌の原因が、ヒトパピローマウイルス（*human papillomavirus*：HPV）であり、このウイルスの感染が子宮頸癌を発症させることが最近わかってきました。HPVは現在100種類以上の型が分類されており、良性のいぼの原因となるもの（1, 2型）、粘膜に感染して尖圭コンジローマ（外陰部のいぼ）になるもの（6, 11型）や子宮頸癌の原因となるもの（16, 18, 31, 33, 52, 58型など）があります。これらのウイルスは性交渉によって伝搬されますが、いわゆる性病ではなく、症状はありません（コンジローマ等の場合はいぼができます）。しかし、性交渉によって確実に感染を起し、日本での報告では、10代の女性で40%、20代では80%の女性がHPVの感染を受けていると推定されています。これらのうち、ごく一部の人々が子宮頸癌を発症します。癌への進展の詳細は不明ではあるものの、このウイルスの感染が子宮頸癌発症の原因であることは間違いないと考えられています。

HPVワクチンは、感染性のないウイルス粒子を抗原として投与し、抗体を発現させて本物のウイルスの感染を予防する薬剤です。現在日

本で認可されているワクチンは2価（16, 18型用）と4価（コンジローマの原因となる6, 11型用を含めたもの）のものが 있습니다。16, 18型の感染を予防することで70%以上の子宮頸癌の発症を予防できると言われています。ただし、このワクチンはすでに感染を受けている場合は、効果がないため、感染を受ける前に接種する必要があります。日本では、高校生になると性交経験率が20%以上になるため、性交経験者が増加する前の中学生までにHPVワクチンを接種することが推奨されます。このため、11-14歳の女児が第一の接種対象者です。また、15歳以上の女性であっても、まだ未感染の女性や感染は受けたものの16型、18型以外のHPVの感染を受けた場合にも、予防に効果があり、15歳から45歳の女性も第二の接種対象者です。欧米では、HPVワクチンをすべて公費負担（無料）で接種するところもありますが、日本では自治体によりまちまちです。自己負担なのか、公費で可能なのかは、各市町村の健診課に問い合わせる必要があります。また、受診したい医療機関でHPVワクチンの接種が可能かどうかを確認することが必要となります。

